

# 差別の現実から深く学ぶ！人権ふおーらむ

29



森口健司さん

御荘文化センターで町内外から約400名が参加して「愛南町人権ふおーらむ」が開催されました。コーディネーターに徳島県北島町立北島中学校教諭の森口健司さん、パネリストとして、鳥取県米子市人権政策課指導職員の坂田かおりさん、徳島県人権工

坂田かおりさん



おのなかの中で一生懸命育てられて、この世に生を受けたのです。私はこれまで、同和教育を受けながらも、「まあ仕方ないか。どうせ被差別部落に生まれたのだからこれも私の人生かな」となかば諦めに近いような自分言い訳をしていたことがありました。ただ、いつか必ず差別をなくすために私

差別されていい命はひとつもない！

皆さん、私たちが今ここにいて、今生きていると考えると

はがんばる。と、いつもどこか心の中でつぶやいていました。そんな私にも高校3年生と高校2年生の娘がいます。はじめて娘を出産したときに私は、命の尊さに気付かされました。私も約10か月間、お腹の中で大事に育ててきました。時には話しかけ、時には音楽を聴かせ、そんなことを繰り返してきました。陣痛がきて、病院に行き出産したときには、我が子を見て、天使が舞い降りてきたと本気で思いました。その時、私をはじめて気付いたことは、この世には差別されていい命も、いじめられていい命もひとつもないということです。どこに生まれましたかとか、誰の子であるとか、障害があるのかなとか、男とか女とか、何の関係もなくこの世に生まれてきてくれただけで十分だと思いましたが、みんなの命は、お母さんが命がけの中で産まれた命、誰一人かけがえのない大切な命です。それが差別やいじめによって汚されることは絶対に許されてはいけないことだと思っています。

## 差別と向き合う

もう一つ考え方を変えたことがあります。命の大切さに気付いたと同時に、私の中に一つの不安がよぎりました。それは、愛しい我が子の顔を見たときに、10年後、20年後、差別されたらどうしようって思いました。心の底から震え上がるほど、差別がはじめて怖いと思えました。

今まで差別と戦うことが当たり前だった私は、我が子を守りたいがゆえにそこから先、部落出身であると語ることを一切やめることにしました。我が子を守るのがまず大事。自分の故郷や自分の立場なんかどうでもいい。我が子の命さえ守ればそれでいいと思えました。私の子どもには、せめて差別をしないう子にと思って子育てをしてき



ました。

しかし、差別はどこまでも追いかけてきます。黙っていても差別は向こうから押し寄せてきます。だったら、私自身が差別をなくす取組みをしていかなければならないと決意しました。

現在の仕事を選び、みんなの前で今日のように自分を語り、周りの仲間と共に差別をなくす活動をしています。この人権学習を通して自分自身が笑顔でいたいし、幸せでいたい。我が子を守りたい、我が子を輝かせて生きていきたい。そして全ての人が輝いて生きていくための取組みでありたいと思います。

## 中倉宏美さん



### 結婚に 反対されて

被差別部落である彼と出会って、付き合い合った当初から結婚のことを考えていました。母親に来年ぐらいに結婚したい人がいるということを

話しました。母親から「この人かと聞かれ、町の名前を言っと、部落の人ではないだろうな、きなさい。絶対許さない」という言葉が返ってきました。

私は、彼のことをよく知ってほしいと思い、愛南町で講演したビデオを両親に見てもらいました。それを見た時点で母親の中では彼が部落出身だということとは確定していて、母親は、発狂したように家の中を走り回ったり、親戚中にもものすごいけんまくで電話をかけたりにしていました。

誰か親を変えてくれないかなと、ずっと思っていました。親を説得する前に、先に結婚して、それから報告するという方法もあるよと、以前聞いていたので、私にはその選択肢はありませんでした。今まで28年間ずっと大事に育ててくれた大好きな両親に、どうしても結婚は祝福して欲しい。親も親戚も兄弟も集まってよかったねって、結婚を祝って欲しいというのがずっと頭の中にありました。親が理解してくれるまでは、結婚

はありえないとずっと思っていました。

### 自分自身のために

そういう、ものすごくしんどい時期に、愛南町の「人権ふおーらむ」に來させてもらいました。川口君の講演を聴いたり、南宇和高校で森口先生の講演があるというので、そこに話を聞きに行かせてもらったら、森口先生から「宏美ちゃん、ちょっとみんなの前でしゃべってみるか」と言われました。

突然だったのですが、5分くらい高校の前で話をさせてもらいました。高校生には、少し前向きな話をしてほしいといけないと思っていたのですが、まったくそんな気にはなれなくて、自分のしんどい思いを淡々と話しました。その帰り際に森口先生から、「宏美ちゃん、周りがなんと言ったって、最後は自分自身やからな」とひとこと言われま

した。その言葉を聞いて、私は周りのことばかりを気にしていたのではないかなと思うようになった。私の親がどんなにひどいこ

とを言っても、彼や彼の両親は、私のことを励ましてくれていて、私にも気付かずに、私は自分一人が悲劇のヒロインみたいにして落ち込んでいることに気付きました。

その後、親が変わってくれないのであれば、理解しないのであれば、自分が変わっていかないと決意するようになりました。すごく簡単なようですが、そこまでたどり着くのに時間がかかったように思います。自分の幸せのために前を向いてがんばっていかうと思えたら、すごく心が楽になってきました。両親と二度と会えなくても仕方がない。自分自身のために結婚しようと思えるようになりました。

二人で婚姻届を出して、親には2か月くらい経ってから手紙で伝えました。その後、いったいどんな反応が返ってくるのかなと毎日身構えていましたが連絡は一切ありませんでした。

ほっとした気分もあったのですが、逆に部落の人と結婚したら縁が切れるのかなって。部落の子になっちゃったのかなって

て。親子の縁とはそんなものなのかなって、考えるようになり複雑な気持ちになりました。

### 「また帰ってこいよ」

それから間もなくして妊娠し、とにかく無事に赤ちゃんを産むということを一番に考えて生活し、長男、里温が生まれました。

その後、彼と里温と3人で不安な気持ちを抑えながら実家に帰りました。実家では、おばあちゃんが家にあけてくれました。隣の部屋では父親が野球を見ていて、おばあちゃんが「宏美帰ってきたで」というと父親は、「何しに帰ってきたんだ」って隣の部屋から聞こえてきました。ああやっぱり怒っているなって思ったのですが、そうしている間に母親が帰って来て、ちよつと驚いた顔をしていた



のです。顔を見るなり、すぐに里温を抱っこしてくれました。ちよつとあっけにとられたのですが、里温を抱っこして、よしよしと言ってかわいがってくれま

した。家の中では父親が黙って野球を見ています。無視するわけにはいけないので、父親に「ただいま、帰って来たよ」と言いました。そしたら父親は、ちよつとこっちを見て、小さな声で、「元気にしよったか」って言いました。「うん。元気にしよったよ。子どもが生まれたから今日連れて来たよ」と言いました。寝ていた里温を連れて行き、抱っこしてもらいました。「里温って言うんよ」と言うと、「男の子か、女の子か」と聞かれたので、「男の子よ」と答えました。「また、帰って来いよ。」と言って抱っこしてくれました。

ちよつと戸惑ってはいたので、やっぱり家に帰って良かったと思えました。それから毎週のように家に帰りました。そうするうちに、父親も母親もすぐくなれてきて、里温を大事にしてくれました。近所や親戚の家に里温を抱っこして見せに行ってくれました。今まで反対していた親戚からも、逆にお祝いをもらったりしました。結婚式の写真を持っていくと、親戚のおばちゃんに見せながら、彼のことを「男前やろ」と

言って自慢をしてくれました。次の年に次男の響希が生まれ、出産の時には母親が来てくれ、里温の出産の時には、彼と二人で一生懸命がんばったのですが、響希の時には母親が病院に来てくれたうれしさで、「痛い、痛い」と言って母親に甘えてしまい、母が背中をさすってくれたことがうれしかったです。

その時母親は彼に、結婚することを反対していたのだが、みんなに一生懸命してくれる旦那さんで良かったと言っていました。今では二人の子どもを大事にしてくれていることや子どもたちを通じてこれからは差別をしないと思うことを話してくれました。

### 未来塾の歌発表

今回、未来塾の歌を作詞するに当たり、未来塾の塾生一人ひとりの好きな言葉や希望の持てる言葉を出し合い、全ての子どもたちの想いを込めて作りました。その歌詞に秋本良次・大森文化会館館長が作曲し、土居俊一・南宇和高等学校吹奏楽部顧問が編曲をし、「私たちの合言葉」が完成しました。当日は南宇和高等学校吹奏楽部が演奏し、「私たちの合言葉」を会場が一つになって歌いました。

